人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

石川県小松市

○学校名

小松市立松陽中学校

○学校のＵＲＬ

http://www.hakusan.ed.jp/syouyo-j/

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】１年生７学級、２年生６学級、３年生５学級
【特別支援学級】２学級　　【合計】２０学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】６３８人（平成２６年１１月１日現在）
（内訳：１年生 233人　２年生 212人　３年生 193人）

○人権教育開発推進事業，人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成２５・２６年度　文部科学省　「人権教育研究指定校」
平成２５・２６年度　石川県教育委員会・小松市教育委員会　「人権教育推進校」

○学校の教育目標，人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】　「心豊かで文武両道を目指す生徒の育成」
【人権教育に関する目標】
「確かな学力と豊かな人間関係の構築を目指した人権教育の推進」

○人権教育に係る取組一口メモ

生徒の主体的な活動を中心とした集団づくり、学力保証のための授業改善等を通して生徒の自尊感情を育て、豊かな人間関係を築くことを目指す。

○人権教育にかかる取組の全体概要

○学校教育全般を通じて推進するための四つの柱と研究部会
①全ての生徒に学力を保証する取組・・・授業改善部会
学力の保証をすることが、生徒の人権を守ることにつながるとの認識に立ち、「わかる」授業づくり、生徒が互いに「学び合う」授業づくりを目指した授業改善に取り組む。

②自尊感情に基づく豊かな心の育成・・・心の教育推進部会
「自分は大事にされている」、「自分はかけがえのない存在である」と生徒が

自己を肯定的に捉えられることが人権教育の第一歩と考え、道徳や特別活動を始め、あらゆる場面で生徒の自尊感情を育む取組を工夫する。

③集団づくりによる豊かな人間関係の構築・・・集団づくり推進部会
生徒の人権が大切にされている学級・学校は、個々の生徒にとって居心地のよい場所となり得るとの認識に立ち、生徒の主体的な活動を支えるとともに、各学年のリーダーを育成することを中心に、生徒会活動や学校行事、学年行事を活用することで共感的人間関係に支えられた集団づくりを目指す。

④アンケートによる検証と情報の発信・・・調査・広報部会
取組の成果を検証するために、アンケートを活用する。その結果をコンピュータを用いて集計することで、迅速に課題に対応できる体制を整える。それとともに、ホームページを利用して本校の取組を保護者や地域に広く発信する。

３．特色ある実践事例の内容

◆　生徒会、学年リーダー会を中心とした集団づくりの取組

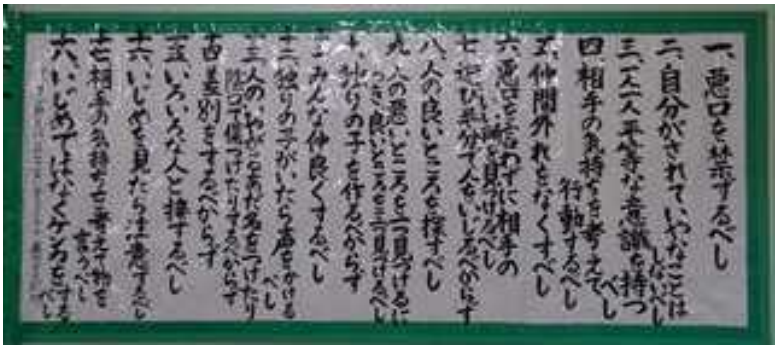
（取組のねらい、目的）
生徒会活動や、学年リーダー会の活動を活性化することで、生徒の自主的、自立的精神を育むとともに豊かな人間関係に結ばれた集団を育てる。

（取組の内容）
①　一体感プロジェクト
生徒会を中心に、生徒が一体感を得ることを目的とした、以下のような取組を行った。

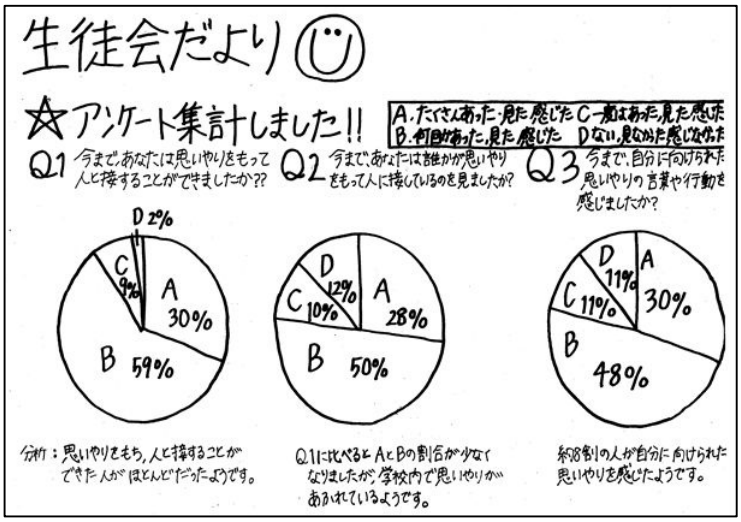
・朝のあいさつ運動
各学年のリーダー会も協力し、執行部と一緒に玄関前で登校してくる生徒たちに元気よく挨拶をしている。
・給食時の放送
毎週月曜日に「SHK ラジオ放送」（後期は「松陽ZERO」）と銘打ち、日常の中で温かさや一体感が感じられた光景を紹介している。
・運動会、文化祭などの行事
運動会に向けた団活動では、毎回、執行部の生徒が「一体感を感じた光景」を紹介するとともに，団長の生徒も気づいたことや心がけたいことを全校生徒に呼びかける姿が見られた。文化祭のオープニングでは、４月以来，生徒会が取り組んできた一体感プロジェクトを振り返り、今一度、全校生徒が一体感を感じられる松陽中学校を目指そうと呼びかけた。

②　18条のいじめ０（ゼロ）憲法
いじめについて全校生徒で考え、いじめをなくしたいと、前期執行部では「いじめを考える集会」を企画した。各学年リーダー会の協力も得て、学校生活で想定されるいじめをドラマの形でビデオ撮影し、それを上映した後、いじめを

松陽中学校から根絶したいという執行部の思いを述べた。集会後は各学級で「いじめをなくすために必要なこと」を話し合ってもらい、それを基に作成したのがこの「18条のいじめ０憲法」である。

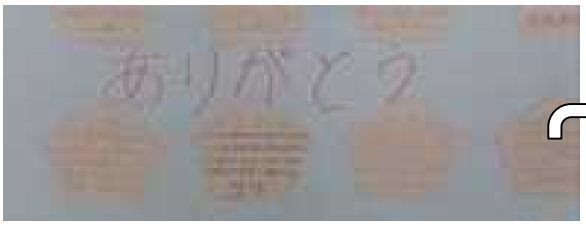


そしてこの憲法を教室や生徒玄関に掲示し、日常生活で心がけるよう呼びかけるとともに、達成度アンケートをとり、その定着度を振り返っている。アンケート結果は、生徒会だよりを通じて公表され、全校集会の場でも報告された。後期執行部も、前期執行部の意志を受け継ぎ、達成度アンケートに取り組んでいる。



③　リーダー会による学年メッセージ交換

中学校での部活動の総決算と言える加賀地区中学校体育大会を前にして、１、２年生リーダー会が中心となり、３年生への応援メッセージを作成し、生徒玄関に掲示した。また、運動会の後は、リーダー会の呼びかけで、各団の３年生から１年生、２年生に、１、２年生から３年生にと、互いにありがとうのメッセージを交換し、学年間の絆を深める一助となった。



１年６組

運動会，お世話になりました。大縄の練習などでもアドバイスをくれたり，ダンスを教えてくれたりしてありがとうございました。受験，頑張って下さい。

〇〇〇〇より

◆　生徒が意欲的・主体的に学習に取り組むための授業改善の取組

（取組のねらい、目的）

一時間の授業の中で、生徒が「課題を解決できた」、「自分の意見を発表できた」等のように、自己を肯定的に捉えられる場をつくることにより、生徒の自尊感情を育成する。また、グループ学習を取り入れることで、共感的人間関係を形成する一助とする。

（取組を始めたきっかけ）

全国学力・学習状況調査等の結果から、本校の生徒は「自分の考えを言葉や文章で表現する」ことに苦手意識を持ち、主体的に学習に取り組む姿勢が十分ではないことが明らかになったこと。

（取組の内容）

①「松陽中『学び』のスタイル」の確立

学習に取り組む際の望ましい姿勢を、「ベル学・あいさつ・集中・共感・理解」をキーワードに、「授業にのぞむ『進取』の心構え」として生徒に提示した。それとともに、一時間の学習の流れとして「つかむ・考える・深め合う・まとめる」の４つの場面を，全教科共通のものとして授業づくりをすることを確認している。そのため，どの教科でも授業の始まりには「本時のねらい」を，授業の終末には「本時のまとめ」を行っている。これらを「松陽中『学び』のスタイル」として教室に掲示するとともに、年度当初の全校集会で生徒に説明を行った。

松陽中学校「学び」のスタイル

つかむ	○本時の課題を理解する ○これまでの学習を想い起こす ○予想や見通しをもつ
考える	○課題の解決 ・これまでの学習・経験に基づき、自分の考えの根拠を明確にする
深め合う	○考えの交流 ・自分の考えを根拠を明確にして説明する ・自分の考えと比べて、友だちの考えを聴く ・気づきや考えの変容を伝え合う
まとめる	○学びの自覚・振り返り ・本時の学習でわかったことをまとめる ・考えを交流して、友だちから学んだことを振り返る

②　生徒指導の３機能を生かした授業改善

学習を通し育てたい力を、「将来への展望を持ち、意欲的・主体的に学習に取り組む力」、「自己を肯定的にとらえ、自らに責任を持って行動する力」、「互いの違いを認め、尊重し合い、仲間のために行動できる力」と定め、生徒指導の３機能を生かすことで、これらの力の育成を目指した。学習指導案にもその単元（題材）で、どの力を、どのような手立てで育てるのかを下図のように明記して、研究授業の整理会での視点とした。

３．研究主題との関連（人権教育の視点）

育てたい力

①将来への展望を持ち、意欲的・主体的に学習に取り組む力
②自己を肯定的にとらえ、自らに責任を持って行動する力
③互いの違いを認め、尊重し合い、仲間のために行動できる力

本単元では，需要と供給の関係から市場価格が決定するという事象について，グループになり消費者と生産者の気持ちを考え，話し合う活動を取り入れる。その際に，まず一人の消費者としての個人の意見をしっかり持ち，話し合いに参加することで視点②の「自己を肯定的にとらえ，自らに責任を持って行動する力」を育てたい。また，班員が各々の考えを持ちより，協力してグラフを作成する活動を通して，視点③の「互いの違いを認め，尊重し合い，仲間のために行動できる力」を育んでいきたい。

③　言語活動を取り入れたグループ学習の工夫

共感的人間関係を築くために、グループでの学習が有効と考えた。そこで、自分の意見を「書く」、「話す」場面を意図的に設定し、グループで意見の交流が為されるように、全教科で言語活動の工夫に取り組んだ。大勢の中では、意見を発表することがなかなかできない生徒も、４人程度の少人数のグループの中では、抵抗なく発表することができた。道徳や学級活動においても、このグループ学習によって意見が活発に交わされ、とても有効であった。

④　各種アンケートによる取組の検証

生徒達が、本校の「『学び』のスタイル」を意識して授業に取り組むことができたかを自ら確認するために、「『学び』振り返りシート」を用いた振り返りを月末毎に実施している。また、教員に対しても生徒指導の３機能を生かした授業づくりを意識してもらうために、「自己点検カード」による振り返りを行っている。更に学期末には、「授業アンケート」を実施し、生徒達による授業評価を行うことで、取組の検証を行っている。

４．実施する際に生じた課題及びその解決策

（課題）

授業改善の視点として、昨年度は「意欲的に学習に取り組むための工夫」と、「思考力、判断力、表現力を育てるための言語活動や学習課題の工夫」の２つを設定した。しかし、授業改善を通してどのような生徒を育てたいのか、人権教育との関連が曖昧で分かりにくいという声が聞こえてきた。

（課題に対する対応）

年度当初に、本校の校訓「自主，自立，奉仕」を生かし、以下の「目指す生徒像」及び「人権教育を通じて育てたい力」（前述）を設定した。

【目指す生徒像】

①「自ら進んで行動する生徒」

②「自分の言動に責任を持つ生徒」

③「思いやりの心で、人のために尽くす生徒」

【人権教育を通じて育てたい力】

①「将来への展望を持ち、意欲的・主体的に学習に取り組む力」

②「自己を肯定的にとらえ、自らに責任を持って行動する力」

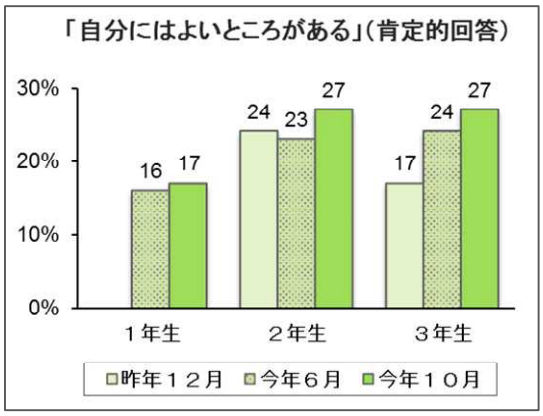
③「互いの違いを認め，尊重し合い、仲間のために行動できる力」

そして、これらの力を育てるために、生徒指導の３機能を生かした授業づくりを進めることとした。これにより、人権教育の視点からの授業改善という、全教科共通の視点を持つことができた。

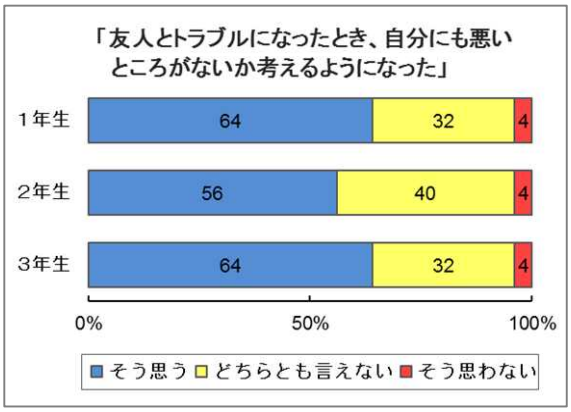
５．実践事例の実績，実施による効果

（人権意識調査の結果より）

グラフ１



グラフ２



グラフ１は、「自分にはよいところがある」と考える生徒の割合を比較したものである。２年生では「そう思う」と回答した生徒の割合が、昨年度の２４％から今年度は２７％に増加し、３年生では昨年度の１７％から２７％へと顕著な増加が見られた。

また、今年６月と１０月のアンケート調査の比較からも、１年生では１６％から１７％に、２年生では２３％から２７％に、３年生では２４％から２７％にと、いずれの学年においても微増していることがうかがえる。

このことより、前に述べたリーダー会活動や、運動会、文化祭などの行事への関わり、更に授業改善の取組等を通し、自分に自信を持つ生徒が着実に育ってきていると言えるのではないだろうか。

グラフ２は、昨年度と比べて、自身に変容を感じている生徒の割合である。昨年度の自分と今の自分を比較したときに、相手の立場に立って、自分を見つめ直すことができるようになったと感じる生徒がいずれの学年においても半数を超えている。ここにも、生徒の人権感覚が育ちつつあることがうかがえる。

６．実践事例についての評価

（１）集団づくりの取組

〇研究発表会参加者の感想より

・授業で生徒たちが自分の率直な意見を言い合えるクラスの雰囲気がとても良いと感じました。

・今、最も必要とされている教育の一つ、人権教育を全校あげて研究されていることをうらやましく思いました。特に生徒会活動において、主体的かつ素敵な取組を見せていただき、ありがとうございました。自分や友達を大切にすることを学んだ子供たちは、きっと豊かな人生を歩んでくれることと信じています。

・授業規律がしっかりとしていて、生徒たちも意欲的に意見交換をしている姿を見ました。自分を大切にされているという安心感があるから、自信を持って発表できているのだと実感いたしました。

・生徒演示で生き生きと活動を報告していた生徒の表情が印象的であった。
・グループ活動の中での生徒たちの活動の中で、よりよい人間関係が築かれていると感じ、貴校の研究の成果が現れていると思った。

（２）授業改善の取組

○生徒による「『学び』振り返りシート」の集計結果（１０月分）から

下の表において、②、③の結果からは８０％以上の生徒が「つかむ」、「考える」の項目、つまり「本時の課題を理解する」、「課題に対し自分の考えを持つ」ことを意識していることがうかがえる。また、７０％以上の生徒が、互いに学び合い、その中で級友の良さを発見することを意識していることもうかがえる。これらより、本校の「『学び』のスタイル」は着実に生徒に浸透しつつあると言える。

	①学びの姿勢を大切に、あいさつがしっかりとできる				②今日の課題をつかみ、授業に取り組んでいる			
	1	2	3	4	1	2	3	4
1年生	42.3	45.8	11.9	0.0	24.0	57.3	18.1	0.9
2年生	30.2	49.2	19.1	1.5	19.1	62.8	17.6	0.5
3年生	25.8	50.5	21.4	2.2	31.3	56.0	11.5	1.0

	③課題に対する「考え」をもって、授業に取り組んでいる				④根拠をまとめ「考え」を伝えている			
	1	2	3	4	1	2	3	4
1年生	19.8	52.0	27.3	0.9	10.1	44.9	41.9	3.1
2年生	25.1	49.2	24.6	1.0	13.6	49.2	35.7	1.5
3年生	30.8	50.5	16.5	2.2	19.5	47.8	29.7	3.3

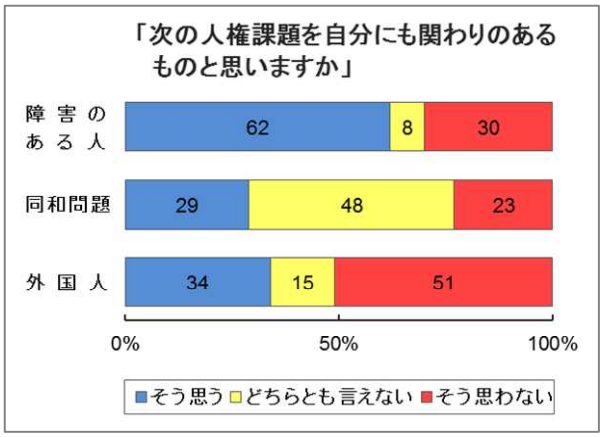
	⑤友達の良いところを色々な場面で見つけている				⑥積極的に学び合い活動に取り組んでいる			
	1	2	3	4	1	2	3	4
1年生	32.2	44.5	19.4	4.0	27.3	52.9	18.1	2.6
2年生	30.2	43.7	25.1	1.0	27.6	51.3	17.6	3.5
3年生	29.7	53.8	15.4	1.0	31.3	47.8	19.2	1.6

1：強く意識して取り組んでいる　2：意識して取り組んでいる
3：あまり意識していない　4：ほとんど意識して取り組んでいない

（３）今後の課題

①「自分は大切にされている」、「自分は認められている」と生徒が感じられる場面を工夫することで、自尊感情の一層の育成に取り組むこと。
②より広く、深い共感的人間関係を築くことができる集団づくりを目指すこと。
③様々な人権課題に関する知的理解を深める取組を工夫すること。

右のグラフに見られるように、生徒達は、同和問題や外国人の問題など、様々な人権課題を学んできているが、それらを自らの人権課題として捉えられる生徒の割合は決して高いとは言えない。



差別はされる側の問題ではなく、差別する側の問題であること、そして、差別に対する無関心が差別を助長するものであることを、今一度肝に銘じて、生徒達の人権感覚をより一層育てるべく、人権教育を推進していきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

小松市立松陽中学校
全ての生徒の学力を保証する「学力改善部会」，自尊感情に基づく豊かな心を育成する「心の教育推進部会」，集団づくりによる豊かな人間関係を構築する「集団づくり推進部会」，アンケートによる検証と情報の発信を行う「調査・広報部会」といった校内推進組織を設け，生徒会やリーダー会などの生徒活動を軸に人権教育を推し進めた事例となっている。 実践事例においては，殊に，いじめ根絶に向けて各学級で話し合った内容をもとに作り上げたという「18条のいじめ０憲法」の取組が注目される。「自分がされていやなことはしない」「人の悪いところを一つ見つけるにつきよいところを三つ見つけるべし」などの条文には中学生らしさがあふれていて，生徒たちの支持を得たことがうかがえる。 今後も生徒一人一人の主体性を尊重する中で，継続的で粘り強い実践の展開が期待される。